
僕とバカと召喚獣達！

麗也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕とバカと召喚獣達！

【Zマーク】

Z3080Z

【作者名】

麗也

【あらすじ】

ここ文月学園に転入してきた影譏麗やは2・F組の仲間達と楽し
いく無事にちやんとした生活を送ることができただろうか？
そして幼馴染との再会と展開は・・・

キャラクター紹介（前書き）

初めまして！初めて投稿してみましたが、下手くそでいいません！
こんな下手な小説をみてくれたらとても嬉しいです。

キャラクター紹介

キャラ紹介

主な登場人物

影譲麗也 木下姉弟との幼馴染。観察処分者同様の力が使える。明久の次にバ力。

吉井明久 文月学園を代表するバ力。観察処分者。

坂本雄二 小学校の時は神童だった。不良。頭がとてもキレる。

土屋康太ムツシローリ 保健体育以外は何もできないバ力。写真を撮るのが得意。まう。料理が得意。

木下秀吉 演劇部に所属している。文月学園が誇る美少女? 声帯模写ができる。

霧島翔子 学園首席。一途な女の子。自称坂本雄一の妻。

姫路瑞希 学年トップ2。料理の腕は殺人級。吉井明久に恋をしている。

島田美波 ポニーテールと釣り目が特徴の女の子。ヤンデレ。吉井明久に恋をしている。

る。

木下優子 B-L本が大好きな女の子。なぜか顔
はカワイイはずなのにもてない。

清水美晴 同性愛者。島田美波のことが大好き
な女の子。

久保利光 清水美晴同様同性愛者。吉井明久が
大好きな男の子。

工藤愛子 ボーイッシュな女の子。保健体育は
実技が得意。人をからかうのが好き。

（ストーリー紹介）

に転入してきた。

主人公影譲麗也は高校2年生の春にここ文月学園

そして、2・F組に入るがいつたいどんな生活を

送るのだろうか？

そして、久々に会う幼馴染の反応は？

キャラクター紹介（後書き）

これから作品作りに入りますが、なるべく下手に書かないようにがんばりたいです。では、期待している人はあまり期待しないで下さい。でも、頑張って自分なりに書いてみます！

～出でこ～（前書き）

さつそく第一話投稿してみたいと思います！書き方は下手くそですが、そんなの気にせずに読んで頂けたら幸いです。

～出会～

影譲 side

桜が満開に咲くこの文

円学園に僕は今日

転校する・・・ちよつと心配だ・・・。

第一回の方に来るのは大分久しぶりだ。

この僕のことなんて誰も覚えていないと

思つし、だいたい僕の事を覚えている奴

がいたとしても僕の知らない奴だろう・・

たぶん・・・。もし、僕の幼馴染がこの

学校にいたらな〜。・・・・・。

つて!こんな事してられなかつたんだ!

急げ、急げーーー早くしないと遅刻しちゃ・

ドンッ!

「痛つ！す、すいません！前ひやんと見て
いなかつた

ものだから！」

「いてて・・僕も前見ていなかつたからご

めんね・・つて

君誰？」

「あつー僕、今日転校する影議麗也と言
います！よろしく
お願いします！あの・・君は誰ですか？」

「あつー僕？僕は吉井明久って言つ名前で

君と同じ

間ー悪いけど

学校の生徒だよ・・つてーもうこんな時

僕もつ行くよ！遅刻しちゃうと鉄人に怒
られちやうから

ねー君も早く行つたほうがいいよーーー！
！・・・

あ・・行つちゃつた・・僕も急いだ方が
いいや。

それにしてもこの学校（文月学園）に入
る前に

振り分け試験？つて言つテリストをやつた
けど大

丈夫かなーー?僕、テストやる前にずい

ぶんと

遊んじゃつたから全くできなかつたんだよな~

たぶん僕の予想で絶対に点数は悪いな・・

どうしようか?もし、点数が悪すぎると

最低と

言われているFクラスに入っちゃうもんな~

本当にどうしようか?まつ!いいか!どうせ良い

点数なんてとれるわけないし、それにあんまり悪い

方向に考えるとろくなことはないしな!

マイナス

思考はダメー・プラス思考、プラス思考!

うとうん!

きつと大丈夫なはず・・・うん、きつと

大丈夫を・・・

まあしかたがないよ！

Fクラスに入るしか

ないよな～

スに入る事に

なんでこいつた・・よつてFクラ

やつぱり嫌だ

なるなんて・・どうしよう、どうしよう・

な～・・もしも、知っている奴一人も

いなくて孤独のまま

一年を過ごす事になつたら僕泣いちゃ

うよ～

題のFクラスの

そんな事を考えながら歩いていふと問

いる・・・

前に来ていた・・嫌なオーラが漂つて

「やつぱり、こんな点数だよな～ま、

遊んでいた自分が悪いんだし・・諦め

「

そんな事を考えて「い」と教室の方から

担任と思われる

- ・なんだりう?
- ・男性がクラスの皆さんに何かを話している。

担任（福原慎）「それでは今日は転校生が来ているので皆さんに紹介をしたいと思います。教室に入つてわいわいださー。」

- ・確か誰かが
- ・あつ！僕とつひと呼び呼ばれかけたよ。・

言つていたなーーー人の印象つて言つのは、最初に決

まるつて・・つん！最初で決まるのなら皆を圧倒させる

よつな皿口紹介をしつやねー・つるー・や

つてやるべーもつ、

決心はしたべー・つるー・やつてやねー・

担任（福原慎）「どうしたんですか？入つてきてもいいんですよー。」

そんな考えをしてくる内にどうやら呼ばれたようだ・・

「失礼しまーす！まず、初めに僕の名前
は影譲麗也と

申します！これから一年間よろしく
お願いしまーす！」

「クラスの皆「…………」

え？ ちよつと唐突すぎたかな～？ なん
か皆僕の事を見る

「…………」
いつ視線で見ている
視線が「バカだ・・・コイツ・・・」って

よ？ いつたい何がいけなかつたんだろ
う？

そんな考え方をしている時、誰かが僕の
ことについで

しゃべっていた……

「あ！ あの人確か校門の前でぶつかっ
たひどだ！ えーっと

確か名前は……」

「影譲麗也じゅりゅーおやぢく……」

よ・・・つて！なんで

秀吉影讓くんのこと知ってるの?」

「知つてあるもなにも・・・麗也はわ

しの久野義清

68

クラスの端「えええ――――――――――――

卷之三

そこでしゃべっていたのは、吉井く

僕の幼馴染だつた・・・

ん
と

～出会い～（後書き）

いかがだったでしょうか？ほとんど書き方は原作と同じになっちゃいました。すいません！書き方があまり僕分からないのでちょっと同じになっちゃいましたが、もう少し！後、ほんのもう少しでいいんです！そうしたら、自分オリジナルな書き方を見つけてみせますので、もう少し、この書き方でよければこの小説を見ていただくとありがたいです。後、この小説を見ていただきありがとうございました！

* 説明下手ですいません。あと、追加のキャラクター紹介 今更すいません！

福原慎 明久達の担任。

鉄人 西村教諭のこと。あと、補習担当の先生。

後、自分のことを小説に出していくますが、すいません。これもやっぱり欲望といいますか、欲と言いますか・・・とにかく自分を出しちゃってすいません！でも、そんな

小説でもよければ、見てください！みていた
だければ、幸いです。

～紹介～（前書き）

一気に今日で二つ投稿させて頂きます！みていただければこちらと
しても幸いです。今回は、ちょっとタイトルがタイトルなだけに小
説はほんの少し短いです。

つた

よ～～！」

「いや・・わしも正直びっくりじゃぞ？」

また

麗也と念ひとせ思わなかつたからね。

「

「いや、僕の方がびっくりだよーそれに
こ念えて嬉しいしー。」

「そいつ聞いてもらえると嬉しいのうーわし
も念えて嬉しいのじやー。」

「あれ？そつこえは優子は？秀吉、優子
はどうなの？」

「姉上のことか？そりゃつたな・・麗
なにも知らぬからねー・・姉上はACK
やは

ラス

「ここののじや。」

「えつ！あの優子が？昔はバカだったあの優子がAクラスだつて？へえー成長したんだ優子も。昔は・・・」

明久「あのー楽しく話している途中悪いけど・

須川くん達が思いつきり影譲くんのこ
んでいるよ・・・ほひ。」

『えつ？』

・
と睨
こと
いけ
ね・
チャ
の会

（ここだけの話、須川くんは異端審問会長だから、あんまり彼の前で女子とイ

ど、これ以上秀吉と話さない方がいい

睨んでいるね・・・どうしてか分からな

つけ
まだ話したいけど。

（ここだけの話、須川くんは異端審問会

メだ

よ？殺されりやつから・・・

僕にしか聞こえない声で吉井くんが言

うと

その場から離れた・・でも、吉井くん

の発

言はちょっと疑問に思つ所がある・・・

秀吉は女の子じゃないんだけどなーー・

まーいつか！気にしない！気にしない！

「あー影譲くん、まだ秀吉以外の人達の
は知らないとおもうから、一人ずつ自

己紹

介しようつよー！」

？？？「おう・・それがいいな。」

そつと背の高い頭がつんつんな人

が自

己紹介を始めた・・

「俺の名前は、坂本雄一ってんだ。代表

坂本でもどうでもいい……」これから

でも
よろ
しくな。」

そつやつてダルそつて血口紹介をする

と寝

てしまった。大丈夫なのかな——？

？？？「じゃあ、次は俺がやる……」

そつ言つと小柄な体格をした男性が前

いで

て自己紹介を始めた……

「……名前は土屋康太……」

名前だけ言つとササッと小走りに走つ

去り際に何かを落とした……なんだろ

カメラ？カメラなんか何に使うんだろ

う？

う？

たが

「これは……授業の様子を撮るためのも

の・

・・・」

「「「嘘だつー。」「」

うん? ものすゞこツツコ//をこれられ
たけ

ど、別に変なことは言つてないよ? そ

れに、

ミを
さりきまで寝ていた坂本くんもツツコ

いれるへりいだから、さりと嘘が皆に

とつ

てはもひ見え見えなんだひつ・・。

「おーーームツツツリーー・・影譲の前でなに平

然と嘘つくんだーうん? 別に隠さなくともいいじゃねー

か・・?

いつかは知ることなんだから・・な、影譲?

実はな・・このカメラはなーーやりじこーーとをする

ために使うカメラだー!」

「へえーそつなんだ―――つてええ―――
！」

それって犯罪じやないの―――」

「・・・・・・!（ブンブン）」

必死に首をふりているけども「う遲いよ

??

事実知っちゃったし・・・

「さて――これで一応この場にいる奴全員
は紹介終えた・・・」

「まだでしょ――――――――・まだこの紹介をしていないでしょ――・全く・

・
雄一には呆れるよ・・・

「おーすまなかつた・・明久がまだだつたな

・・・いいぞ・・わざとやら。」

「つたぐ・・じゃあ改めて紹介するね！

名前は吉井あきひを・・・つてなんで

くんと秀吉以外の二人は帰っちゃつた
影譲 僕の 僕

の
!

そんなに僕のことはどうでもいいのお

卷之三

「吉井くん、行つてしまつたね・・・」

「歸、行つてしまつたのう・・・・・」

1

ができると、心の底からおもつ

•
•
•

～紹介～（後書き）

すいません！予定より文が長くなつてしましました・・でも、こんな小説でも読んで頂けると僕としては嬉しい限りです！

～誘い～（前書き）

応援頂いているよつで嬉しいです！今回は秀吉と麗也が遊ぶ話です
！見ていただけたら幸いです！

影譲 side

あーやつと授業全て終わつた――！

慣れていないせいかずいぶんと時間を
長く感じたな―――さて―もう授業
は終わつたし・・・もう疲れだし、帰
るうかな――・・・

と、そんなこと思つてゐるとひとつの
人が近づいてきた・・うん？よく見た
ら秀吉じゃないか！いつたいなんの用
だうう・・・

「麗也よ・・今日・・ひまかのう？」

「えつー別に用事はないけど・・・

「だ、だつたら今日久しぶりに遊ば
ないかのうーわし、何もすること
がなくて悩んでおつたんじゃが・

・・エウかのウヘー。」

「「つーん・・どつこりうつかな~? 今
日、暇じやないけビ、疲れたから
な~・・」

「あつー別に無理じやつたらここの
じやだ~?」

あー…そつこえば秀吉と遊ぶのは久
じぶりだな~こじで断るのもで
あるナビ、せつかくの誘いだし、
なんか断るのも悪い気がするしな
~・・・つてアレ? 僕つてこんな
優柔不斷な男だつけ? と、とにかく
くー! 秀吉のせつかくの誘いだし、
遊びじやおつかー!

「いいよー別に、僕も暇だつたしや
!」

「ほ、本当かのつーじやあ、帰つた
らすぐたまに来るのじやぞ? あつ

！わしの家は知つておるな？昔と
変わらない所にあるからのう！…じ
やあの‘つー！」

タタタタタッ！

あ！行つちやつた・・そんなに嬉
しかつたのかな？ま！僕も久し
ぶりに話せて嬉しいし！走つてか
えろつと！

僕はなぜか足がとても弾んでいた
・・・なんでだらう？

「こー」だつたよね～確か秀吉の家つ
て・・・」

僕は自分でも早いと思われるほど

早く秀吉の家に着いてしまつた・

・・うんつ？確かに前にはこんな所

に花壇なんてなかつたはずなんだ
けどな～～？ま、おおよそ考え方
くのは、たぶん秀吉のお母さんが
飾つたんだろう・・・つとーそんな
事よりも早くいかなきやー秀吉待
たすのも悪いし・・わざくイン
ターфонをおせせてもらひつかな
?

ピンポーン

ターホンから秀吉の声が聞こえた
そうじてひよつと経つた後にイン
ターфонから秀吉の声が聞こえた
…

「ちよつと、待つのじや。」

吉がドアの前に来た・・つて早い

な!

「 セウー・セウーー・早く入るのじゃー 」

僕は秀吉の家に入るのにドキドキし

た
・
・
・

何でだろ?!

～誘い～（後書き）

まだ秀吉と遊ぶ編はまだ終わっていないのでまたよんでも頂くと幸いです。

～思ひ出す～（前書き）

今回で「」の話が終わるよう、頑張って書きます！読んで頂くと嬉しいです！

影譲 side e

「おじやましまーす！」

僕はなぜか懶を呪で家の中に入った・

・
上へ

僕・・じつはかつたんだが・・

アヒハツト御さんこと、こいつの間で

か秀

34

吉の部屋に入っていた・

「さういふ一何して遊ぼうかのう 麗也一

「ちよつと待つて一秀吉一ちよつと落ち着いひへね?・

り乱
「ちよつと落ち着いひへね?・

「あ、せうじやつたな・・ちよつと気が

ていた・・すまん・・

乱れ

「あつ！別に謝らなくていいよー特この

気に

しないし・・・」

「やつか？いやーやつぱり麗せは優しい

のや。」

「や、そんな事言つたら照れるな～・・・
つとん

な事よりもなにして遊ぼうか～・・・

「やつじや のや～・・・いや～実は」れい
つて特に
しようか
の～？」

「やん・・僕もここに来る前にここも

聞いてい

なかつたし、持ち物もなにを持つてく
るのか聞

いていなかつたし・・本並じでひつよ
うか？

校ではあ

須川くん

まつはなせなかつたな～まーほとんど

つたつて

言つ事實があるんだけどね・・あつ・

そうだ！

久しぶり

久しぶりつていつのもあるし、秀吉と
に話そうちかな～？僕も話したいことが

あるし・

・・・うん！決定！

話とか、

・や

メかな？」

「・・・えつ？そ、そりじゃの～！わし

りたい事とか考えつしまでさー・・ダ

思い出話とかしないかい？ほらー！その・

も麗也と

あさつそ

くなにか話そうとこよひつかの～麗也よ

？」

揺しすが

「や、そりだね～。それで秀吉動
じやない? なにかあったの?」

「や、それはひからせにせつじやー麗也

ひからお口も口こじめじや ひらひへ。」

「いや～なんか秀吉と対面するとなんか

ひみつ

昔と違つて緊張するんだよね～なぜか・

・

「・・・すまん。それはわしもじや・・・

「・・・・・・・・・・・・」

しばしの沈黙・・・う～んなんか昔み

たいに普

通に話すことができないかな～?・・

みひし

つかな～?・・

そんなことを考えてこぬつりアドアか

らノック

がかかった・・

トントン
ンテント

「・・・あ、誰なのじゃ？」

「もつー私に決まってるじゃないいい

からあけ

わよ？」

ガチャ

「お、おー姉上じやつたか・・いつたい
何の用じや？」

「いや・・・ただマンガを取りに来た・・

つてわから

男性は誰？」

「ん？姉上よ・・・もう忘れてしまったの
かの？麗也

「じゃ。影譲麗也じや・・・」

「あー麗也なのーー久しぶりねー元気だ
つた？」

「うん・・・おかげをまで・・・（はあ

（～）」

こんでるナビ

「うん？なによ？柄にもなくかなつおち

・・・何かあったの?」

「うむ。実はのう・・・」

～説明中～

「ふ～ん・・なるほどね。久しぶりに会つて二人とも緊張してるんだ～・・だつたら解決策は一つね・・」

「む? 姉上よ・・もつたいぶらぎに早く教えるのじや。」「

「せつだよー優子! せつだと教えてよー! 」

「それはね・・なにも考えずにお互いの素直な気持ちをそのまま言葉にしてぶつけあわせばいいのよ~」

「・・・? 言葉にしてぶつける・・じゅと?」

「・・・優子、もうちょっと分かりやすく説明してくれるかな~?」

説明してくれる

「んもうーだからー思つたことをそのまま

ちよつと遠慮して

「いい感じだ。」

「思つたことをそのまま言つていい。」

「そつね……だって私からみたら互いに見えたのじよつ

てるものがみえてるもん。」

「姉上から見たわしうまほんなふつに

たのか……」

「確かに……優子の言つとおりかもね……

」

・後は一人でうん……確かに僕もじよつと遠慮して

どうにかしなさい……

ガチャ

た部分があつた

かも……

「わしもじよつ、せんせーじよつ、優子の言つてた通り、心

に墮つたことを

「うそーじよつ、優子の言つてた通り、心

「うむ。 わしもこれからやつかる」と云ふ

「あのじや。」

「じゃー改めて話すつかー・秀吉ー。」

「アハハのー・麗也ー。」

「やつやつと顔面の上をやぐらに、

楽しかった事

や困難だったこと、色々なことを話し
ていた・・・

そして二つの間にかもう隣は暗かつた・・もつ
帰らなくちゃー！

「（めん秀吉）ー・おひなへなつたからそろ

そろ帰るねー。」

時がたつのは・

「やつだね・・また今度遊ぼうねー・秀吉

・

「今日せよ」へ
一

樂しかったよー。」

「麗也ー・正直わしもすげえ楽しかったの

じゃー

また、遊ぼうのうー。」

「うんー・じゃあねー秀吉ー・また明日ねー

♪ー・・・・・

「・・・・行つてしまつたのう・・・」

「あんた達、あの後つまくいつたのね・・・

「

「うむー・これも姉上のおかげじゃー・感謝
してるぞー!」

「あーら・・私なにかいつたかしらー?」

「相変わらず素直じゃないのう・・まる
で素直じゃない

麗也みたいじゃ のう・・

「ハックショーンー・うー・・誰か僕のうわ
さしたのかなー?」

そしてそんなことを語つていながらも
頭には今日の「」と

でいっぱいだった・・・。

～思い出話～（後書き）

いかがだったでしょうか？結構長く書いてしまいましたが最後まで
読めてもらえたなら幸いです。

～召喚戦争～（前書き）

あ～本当にすいません…一日間もやらなくて…いろいろ事情があつたもので…。

そんなことよりも次に書く小説は試験召喚獣戦争編です！多少原作とカブりますが（もしかしたらすぐカブるかも）、見ていただけたら幸いです。

～召喚戦争～

影譲 s.p.e

「へへん・・・今日はやけに眠たいな・・・

本当に今日が晴れやうやう・・・くたをしたら授

業中にモ

天気が良いな～

寝てしまふやつだ・・・それにしても今日は

じこちゃんが
ここここじとが

起きたな～よしーそりかんがえると本

起きやつだ・・

いつもやつて着ててこのと後ろから走つてき

てこむよひな音が

聞こえてきた・・

「ねせよひなのじゅー・麗也ー・

「へん?誰かと思つたら秀吉じやないか・・

おはよひー・秀吉ー・

朝からまたか秀吉に会うなんて思わなかつ

たな～～・・・・

もしかしたらおじこちゃんが話した良いこといつひじひひひ
とかな～～?

「ア～ん・・やつぱり秀吉の笑顔を見るとな
んか元氣が出でへんな
～～。」

「ア～ん・・やつつかの～～?そんな事を言われると
照れるのじや・・・

「ア～ん・・そんな事ないよ!だつて本当のこ
とだもん!ホラ今だつて

「んなにげん・・め・・ふうわ～あああ～
・・」

「お主・・・元氣になつたと言つておるくせ
に大分眠れりじやの～

いつたい昨日の夜はなにをやつていたのじ

や?」

「ア～ん・・確かゲームと遊びだつたよ・・

それであつとやつていた

ら、こいつの間にからになつちやつてしまつ

それでかな?寝てのは・・

そのせいか・・な・・ふわあああー・・
口を開けるだけであぐび

がでる・・

「お主せどんだけ暇なのじや・・むつと自分
を大切にするのじやだ?」

「うん・・分かった・・これからは夜の1時
までこするよ・・」

「あれじやあ変わらぬじやうつ・・・

秀吉とそんな何氣ない話をしつゝの間にか教室に
着いていた・・

「嘘～～おはよ～～～～・・

僕は眠気を押し切つてあこせつをした・・うそうん
!-あいせつは大切

だよね!

「・・・・影譲・・麗也・・・・だよな?」

そりてあこせつをうつと須川君へとおぼしき人物が
近づいてきた・・

「うん!僕が影譲麗也だけど・・何か用?」

「わつか・・貴様が影譲麗也か・・皆へコイツを今す

ぐ拘束しろ——！

「ハツ！須川会長！」

「えつ？なになに？なんか僕やつた？つて痛い痛い！

無理やりやらない

でよ！それにそのガムテープ何？まさか、僕の口に貼る気じゃないよね？

本当にやめ……ムグググ！」

「影譲麗也確保！これより異端審問会をはじめ

う……なんだなんだ？なにが起こってる
んだ？」

「被告の罪状は？」

「ハツ！被告影譲麗也の犯罪は、

「朝から女子トイチャイチャしながら登校をしていた」

「です！」

「そりか……審議の結果……判決が下された……被告をロープ無しバンジー

ジャンプに処する……もういいぞ、被告のガムテープを外せ！」

「……ハツ！ハーハーまったく……君たちは僕を殺す氣かい？」

『当たり前だ！女子トイチャイチャしながら登校するなど・・・

死刑に値する行動だぞ！――――』

「それにしてもなんだい？その、ロープ無しバンジージャンプって？」

「そのままの意味だ・・・」

「うん？待て待て僕・・冷静に考えるんだ・・・普通バンジージャンプって

「こののはロープがあるはずだ・・そして今彼らがやるつとしているのは

「ロープ無しバンジージャンプ・・・これすなわち意味することね・・・」

「死に値するつてこいつと・・・つてことは君たちは僕を殺すつていうことか！」

「今頃氣づいたのか・・バカか！お前は・・・

「ハ～・・君たち・・分かつてないな～そんなことしたらどうなるかって・・・」

「知っている、そんなことは・・・

「だったら今すぐやめた方がいいよ？そんな

「」と・・・

「「それをやつたら俺は」このクラスの英雄になれる・・・

「おおたちばバカかい？」

そんなことを言つてゐる間に僕の体は窓のすぐそばまで來ていた・・・

「ひつ・・・結構高いな・・・

「須川よー やめるのじやー そんなことはいますぐー！」

「秀吉ーー助けて僕をーーー！」

「分かつた！ いま、助けに行くからのうー！」

よかつた・・やつぱり持つべきものは友達だねー！ 秀吉には感謝しきれ

ないよ・・・

「ダメだ・・たとえ秀吉だからといつて刑の執行を

邪魔させる訳には

いかない・・・

「ええいー こいつなつたらすぐここに鉄人を呼んでくるの

じゃーとこいつ」とで

麗也ーもう少しだけ耐えるのじゃぞ?「

「え? 行かないで秀吉ー秀吉ー—————.」

「よし・・・やうそろ落とすか・・・

「ま、待つてーまだ落とれないでよー頼むか

いりやー.」

「じゃ・・・」

ズンツー

「わーー本当に死んじゃつて———. . .

僕はこの時本当に死ぬんだなって改めて思つた・・・

・

「ふーーほ、ほんとうに危なかつた・・木の枝に感謝だな・・・

僕は奇跡的に助かつた・・落ちてから地面に着いてしまつて

死ぬんだろうなって思つていたけど・・地

面に着く前に木の枝

に引っかかつて助かつた・・自然の恵みに
感謝だな・・

「おい・・お前らいつまで遊んでるんだ。さ
つさと席に座れ・・」

あ、確かに坂本くんだけ? いまのが遊んで
いるよつに見えるつて

「このクラスの人たちはどこまでおかしいん
だ?」

「よし・・全員座つたな・・唐突だがちよつ
と質問するや?」

「・・・お前ら、このクラス環境に不満は
ないか?」

「大ありじやああああ――――――――――!

す、す」「・・ま、確かにそうなるよね・・壊れた窓に

壊れたちゃぶ台・・このクラスじゃなかつたとしても誰
もが思うことだ・・

「そこでだ・・俺達はAクラスに召喚戦争を
挑もうと思つ・・・」

!

僕はそれを聞いた時無望だなとつい、思つてしまつた・

•
•
•

～召喚戦争～（後書き）

すいませんー序盤に思いつきり影譲麗也と秀吉のイチャイチャ？な
ものを書いてしまって・・・でもどうしても書きたかったんです！そ
こは「了承ください・・・」

次は召喚戦争の説明とロクラス戦に入るので見ていただけたら幸い
です。後、今回長くなりすぎてすいません！後最後にもう一つ！秀
吉以外のキャラもちゃんと出させてみせます・・・たぶん・・・い
や、絶対に！

～勝機～（前書き）

え～今回まつクラス戦のところを書きます。またこの作品も秀吉と麗也をイチャイチャしている場面が多いかもしませんが、ちやんとほかのキャラも出しますので読んで頂ければ幸いです。

『勝てるわけがない…』

『負けたら本当に負け犬になるんだぞ…』

『姫路わんがこったらもつ向ひうない…』

『負けられぬで反対した…』

一部の意見はおかしこと細つたゞぎ…

「やつだよー雄二ーこへうなんでも無理すれど細つ

56

うん?誰かと思つたら吉井くんじやないか。さつき
まで

なんで静かだつたんだろ…

「・・・・・俺もやつ細つ・・・

また誰かしゃべつた・・・今度は土屋くん?だつた

と細つ

けど・・・なんでみんな今頃しゃべり始めたんだろ・

・

僕たちが吉井くん達の話を聞いていなかつただけかな？

「でも・・・僕も無望だと思つた～Aクラスに挑むのは・・・」

僕たつて力比べができるほどのバカじゃない・・・

相手の力だつて分かるし、第一バカだけしかいない

このクラス

じゃちょっとAクラスはキツすぎる・・・いや、大分だ

「まあ待て・・・最後まで話を聞け・・・誰もAクラスに挑むなんて

言つていない・・・それに、まだ準備もあるしな。」

「え？でもさつき雄一はAクラスと試合戦争をやるつて言つてた

じゃないか？」

「誰もAクラスに挑むなんて言つていない・・・あくまでそれは

最終目的だ・・・それにさつきも言つたように準備が必要だ・

そして誰かがこういったな・・・無望・・・だと。そんなことは

無い・・・だよな、ムツツリーー・・・それと姫路のス

カートを

覗かないで前に来い・・

「・・・・・・・（ブンブン）」

「え、ええ！」

さつまひと姫路さんはスカートを隠した・・ついて
うかよく

普通に覗こいつもあるなーたすがは、ムッシローーいつ
てこいつ

異名を持った男だ・・・僕だったらもうひょっと手
の込んだ

やり方をするけど、彼はそんなことはしない・・う
ん・・

この男、ある意味すごいな

「ここにいる男こそ、あのムッシローーだ。」

『な、なんだ? 奴がそのムッシローーだと?』

『い、いや・・本当かもしけない・・わざわざって下
あんなに必死になつて隠していたし・・』

土屋くんはバレテいるにも関わらずに畳についたあ
とを

必死に隠そうとしている・・やはり異名は伊達じやない

・・・!

「? ? ?」

姫路さんは頭をおさえて考えていた・・・そつか・・

優等生の姫路さんには無縁の言葉だもん〜・・・

誰か意味を教えてあげればいいのに・・・

「もちろん、姫路も戦力の中の一人だ・・・説明をしなくても

実力は皆分かっているはずだ。」

『たしかに・・彼女ほど頼りになる人はいないな』

『ああ。姫路さんがいれば、Aクラス打倒も夢じゃないぞ!』

みんな思い思いの言葉を言つてはいる・・・ま、普通に

考えればそうなるよね・・・

「そして、木下秀吉だつてはいる。」

『おお！確かに演劇部のホープだったよつな・・』

『あの木下優子の・・』

秀吉に關しちゃ僕もそつだと思ひ・・いろいろとな
んでも

できるし・・手が器用だからな～

「もううん、この俺も全力をだす。」

『確かにあいつは小学生のとき神童だったよな？』

『といつことは、実質Aクラス並みの奴が一人いるつ
てことか？』

『おお！といつことは言つてみれば無敵のクラスじゃ
ないか』

僕はさておき、そんな実力者揃いのクラスだったら

Aクラス打倒

も勝機があるー

「それに、吉井明久だつている。」

シーン・・・

「あのや、雄一・・僕をオチ扱いしないでほしいんだ

けどー！」

あーあ・・・せつかく士氣も上がっていたところなのに・・・

坂本くん・・それは言っちゃダメだよ～せめて最後に「ビシッ！」

と決めてほしかったな～これじゃあ吉井くんがかわいそう

だよ・・

「ちなみに・・明久は観察処分者だ。」

『・・・それってたしかバカの代名詞じゃなかつたか？』

「違つよーちよつとお茶目な高校生が貰つ称号みたいな物だよー」

「そつだ・・バカの代名詞だ・・」

「はつきり言つなーバカ雄一ー！」

観察処分者・・・たしかきいたことがあるぞ・・えーっと・・

意味は確か教師の雑用係で力仕事とかいった類のものを

特例として物に触れる事ができる召喚獣でこなすと

いつた・・

まあ・・用は教師の雑用係といった具合だらつ・・・

でも・・ちょっと憧れるな～ものに触ることのでき

る召喚獣

があるって・・でも、この観察処分者の欠点は自分

にも

ダメージが返ってくる・・・すなわち、フィードバ

ックの

ことだ・・それに召喚者は自由に出すこともできな

いし・・

当然、そこにメリットはない・・だからこそ観察
処分者・・

凄いこともなければ便利でもない・・成績が悪いや

日頃の行い

が悪い生徒に与えられるペナルティ。バカの代名詞

と呼ばれる

所以はそこにある。

『だとしたら、戦闘の時もし召喚獣がダメージを負つ

たら、

召喚者自体もダメージを負うつことだらう。『.

『だよな・・だとしたらおいそれと召喚ができない奴が一人いるつことだよな?』

「その通り!だから僕はあまり戦闘に参加する気はないんだ。」

「気にするな。どうせ、いてもいなくて同じような雑魚だから心配はするな・・・」

「・・坂本くん・・吉井くんがそこで泣いてるよ?」

見てこりのむら側としてもすぐかわいそつな絵になつてこり・・・

ほんとうに吉井くんは悲惨だな・・・

「とにかく・・明久、いまからロクラスへ宣戦布告しに使者となつて

「まづ行け・・・

「えへそつこいつのつて確か下位クラスが行つたらひどいめに遭うん

「じゃなかつたっけ?」

「いいや・・Dクラスはそんなことではない。騙されたと思って

行ってみる。」

「うへん・・分かつた。僕、雄一を信じていつて見るよ・・・」

吉井くんはそつとロクラスの方にクラスの皆さん
の拍手やら

声援を受けながら行ってしまった・・本当に大丈夫
だろ？

「騙された～～～！～！」

僕の目に映ったのはぼろぼろになつた吉井くんの姿
だつた・・・

ま、おおかたこんな風になるよつな」とせよ想して
いたけど・・・

「雄一・・・応聞くけど分かってこんな」とせよせた
？」

「分かつていたに決まつているじゃないか・・そんな
ことも

分かつていなかつたら代表が勤まらんだろ・・・

「あんたは、本当に友達かい？」

この一人をみてふとこりの思ひ・・本当に友達?・・
つと・・

「そんなことはどうでもいいとして・・わざわざいい
ティングを
あるぞ・・」

「ちよつと待つてよ雄二。まだいいたいことばっかり
ないんだけど

! ! !」

そう吉井くんが言いつと坂本くんを追つて屋上に行つ
てしまつた・・

「・・それで。わしらも行いつとするかの~

「うそ。行こうか、秀吉ー。」

僕らは弱子不安を抱きながらも屋上へと続く階段を
上つた・・

～勝機～（後書き）

え～今日は念願の秀吉以外のキャラを引き立たせることに成功できました！でも、まだ島田美波がだせてないんですね～次辺りに出してみます！あと、秀吉もあまり今回はだせてなかつたので、次はこの一人を主にだしてみたいと思います！長いですが、読んで頂ければ幸いです。あと、感想やコメントもよければ出してください。

* 注意・・所以といふ字はゆえんと読みます。

あともう一つ、試合戦争については、前作で出した戦
喚戦争
のことです。（これらからずつと試合戦争で通じてい
きます）

～ミーティング～（前書き）

え～今回の話はミーティングと麗也と秀吉のイチャイチャ？な話です。はつきり言つてこの試験召喚獣戦争編はもうちょっと長くなります。すいません！でも、こんな小説でもよかつたら見てください。読んでくださつたら一通りとしても幸いです。

～ミーティング～

影譲 side

僕たちは屋上でミーティングするため、屋上へと続く階段

に上っていた。・・そして上つてこる途中にある会話が聞こえて

きた・・・

「ちよつと島田さん！腕を引っ張らなこでよ～」

「だつて、あんたがいついじり動ひつとしないからでしょ～！」

「だつて・・・わしきのロクラスの使者で疲れたんだもん～めんどくせそう

だし、僕は遠慮するよ・・・」

「駄目ー吉井も早く来なさいーでないと・・・」

「でなこと？・・・」

「あんたにDasBerechen・・・確かに日本語で・・・

「・・・・調教

「そ、そりー調教しちゃうわよー！」

「島田さん！調教つて言葉じゃなくて・・・せめて教育とか

指導とかの言葉を使って・・

「じゃあ間をとつてNコロコロコロコロ・・・」

「・・・それは分からぬ」

「確かに、日本語で折檻つていう意味だつたかな?」

「それつて、余計悪化していなー?」

「うん? そりがしいっ.」

「そうに決まつてゐるでしょ! それからムツツリーーー
きみはなんでドイツ語の調教つていう言葉の意味
を知つているのかなー?」

「・・・・一般常識」

「うーん・・もしかしたらムツツリーーーが言つて
僕らが思つ常識とちょっと違つのかなー?」

「いやーあんただち遊んでないでさつあと来なさいー.」

「へいへい

「返事は一回ー.」

「へーい・・

そんな会話を聞きながら階段を上がつていくともつ

屋上へと続く扉がもつとぞまであった・・・

「開けるや・・・」

そうこうと坂本くんは扉を開けた・・・

扉を開けると真っ先に迎えてくれたのは、心地よい、
とてもいい風だった・・・

うーん・・今日は洗濯日和だなー!アレ?今日僕って洗濯物
干したつけ?・・・ま、いいか・・・

「じゃあ、これからリーティングを始める・・っとその前で、
明久・・ちゃんとロクラスには宣戦布告してきたな?」

「へ、うと・・・一応今日の午後にこいつおいたけど・・・

「やうか・・だとしたら、まずは昼飯だな・・・」

「やうだとしたら、今すぐ食わないとね~」

「お前、ちやんと食つものあるのか?」

「うん・・・いつも通りだよ。」

「やうか・・・だとしたらお前はバカだな・・・

「なんだと雄」「もつ」辺言つてみろ！」

「ああー何度でもいってやる・・お前はバカだ！」

「なんだと、クソ雄」「！」

「ふ、一人ともちよつと落ち着いてくださいー！その話はミーティングが終わつてから聞きますから！」

「うん・・いつたいなんの話なんだるー？妙に気になる・・

「ま、そうだな・・じゃ、これからミーティングを始める・・
まず、俺達はDクラスに勝てなきやAクラスなんて言つてられ
ない・・

だからまずは前たち」「一つ言つておく・・協力をしてくれ・・
以上だ。」

「え、それだけですか？」

「ああ、それだけだ・・」

「なんか、パツとしないなー・・

「じゃあもう一つ付け加える・・俺達は絶対に負けないクラス、
最強のクラスだ・・」

『や、そこあやつのクラス・・・』

そのとき、坂本くんの言葉に一瞬本氣でそつ思つてしまつた・・

～ミーティング～（後書き）

すいません！なんか微妙な終わり方で！時間の都合であまり書くことができませんでした！それでも、読んで頂ければ幸いです。

～弁当、そして・・～（前書き）

え～皆さま、及び読者の皆さまのおかげにより、第9話まで書くことができました！そして、何よりびっくりしたのは、アクセスサイト数です…まさか・・2000を超えるとは思いませんでした！これも、読者の皆さまのおかげです！そして、最後にこんな小説ですが、今後とも読んでもらえると嬉しいです！

～弁当、そして・・・

影譲 side

「や、やこきょうつかーう

～ん・・なんかあんまりパツと
こないな・・・」

僕は坂本くんがしゃべり終わつた後についにいつてしまつた・・・

それもそのはず、こんな学年最悪貧弱なクラスが最強だなんて
誰もが思つはずもないからだ・・・

「ああ・・・俺らはそこきょうつだ・・ビーのクラスにも負けない・
・・」

「だつたら、なんで雄一は最初にDクラスを狙うの?僕らが仮に
そこきょううだつたとしたら、普通はAクラスを狙うんじゃない
の?」

僕もそつと思つ・・・そこきょううだつたとしたら、迷わずAクラ
スと

戦うはずだ・・・Dクラスに戦いを挑むだなんて・・そんなま
わりくどい

仕方をしなくてもいいはず・・・

「なーに・・ロクラスに挑むのは、今後の景氣づけにしたいから
だ・・それに、
Aクラスと戦うには重要なプロセスだしな・・」

「ふむ・・じゃつたらなむにロクラスにいどむのじや？段階を踏
んで

戦うとしたらEクラス、じゃし、Eクラスと戦つたとしてもその
雄一
言うプロセスにもなるじやうつ・・・

たしかに・・秀吉の言う通りだ・・ロクラスよりもEクラスの方
が勝率が高いし、わざわざロクラスに挑むといつ危ないつり橋
を渡る

必要もないだりつ・・・

「確かに秀吉の言う通りだ・・Eクラスの方がまだロクラスよりも
楽だからな・・だが、俺らにとっちゃ初陣だ・・初めに派手に
やって
俺らはロクラスにも渡り合える力を持つてみると示したいから
だ・・
だからこそ、初めはロクラスと決まっている・・」

「え？ Eクラスよりもロクラスの方が楽だ・・って、雄一もしか
して

Dクラスと戦うのって結構つらいの？」

「ああ・・少なくとも、Eクラスよりも遥かに強い・・」

ええーEクラスよりも遙かに強いつて・・僕たちそんな奴らを
相手に

できるのか?

「でも、だからといって負ける相手では無い・・・心配するな・・・

はあ～よかつた・・それだったらいつ心して呪こよね・・・

「わあ～て・・・叫び」とも言ひ終えたし・・・毎食を食づか・・・

うん?毎食といえば・・なんかあつたよつな・・

「雄一・・・どう行くんだい?」

ガシツ

「明久・・なんの真似だ・・・」

「雄一もしかして忘れたの?」

あー…やつだった!たしか吉井くんの毎食の件だったよね

「ああ・・確かそんな事をいつていたな・・・」

「そりだよーさつときも言つた通り・・僕のどじがバカなんだよー

「うん?話は簡単だ・・お前がいつも食べてこるって言つてるも
のつて・・

「えりせ、塩と水だろ?」

「それのどこがバカなんだよー」

いや・・それってバカビレの問題じゃないでしょ?

塩と水つて・・そんだけでよく生きていけるな~

「吉井くん・・それって、食べるつて言わずに舐めるつて
いう表現の方があっていませんか?」

「ひ、ひめじさんまで・・僕をバカにするのかい?
ちゃんと砂糖だつて食べてるよー」

「あのセ~吉井くん・・それも、舐めるつて言わないかい?」

「まつたく・・影譲くんまで・・」

「あの・・吉井くん、食べるものが無いなら私が何か
作ってきましょウか?」

「へ?」

「よかつたじやないか明久・・手作り弁当だぞー!」

「姫路さん・・君は神さまだよ・・・」

「ふ~ん・・瑞希つて吉井だけに作つてくるんだ~」

「い、いえ・・その・・舐めにも作つてきましょウか?」

嫌ではなかつたり・・

「うん?俺うこも作つてくれるのか?」

「はいー。」

「す、すまんが・・わしは遠慮しておひづり・・

「え、なんで秀吉は遠慮するの?」

秀吉にしては珍しい・・なにかあったのだね?か?

「ほ、ほり・・その・・そんなにたくさん作つてきたとしたら、
荷物が増えんじやう?そんな、女子にたくさん持たせては
体に悪いじゃうから・・」

「え?そんなことないですよ?別にそんなことは気にならないの
で・・

木下くんもいいですよ?」

「い、いや・・わしはやめておひづり・・姫路よ・・
また別の機会に作つてくれれ・・」

「そりなんですか?ならわかりました!木下くんにもそれなりの
理由があるかもしだいですし・・また、別の機会に作ります
!」

「す、すまんのう・・姫路よ・・」

「ううん・・おかしい・・秀吉、なにか隠しているな?」

「いえいえ、気にしないで下さいー！ところで、全部で6人分作つてくれるんですね？分かりました！それでは、明日にでも作つてきます！」

「よろしく頼むね！姫路さんー！」

「おおっと・・・もうこんな時間が・・・悪いが、もうあまり時間はない。さっさと食つて、Fクラスに集合しろよ？それでは、解散ー！」

よしー解散になつたなー！昼食は秀吉と食べて、事情を

話してもうせりゆつ！

「ねー秀吉ー？僕といつしょに昼食たべない？」

「・・・うむ？麗也か？そりじゃな、いつしょに食べよつかのう！」

よしー誘いには乗つてくれた・・後は事情を話すように聞えま・

「うーん・・結局なにも言わなかつたなー秀吉・・」

食べている途中もずっと黙つたままだつたし・・元気もなかつたなー

・・・ひょっとして、お腹がいたいとか、何か言えない事情があるかも

しれないな

『我我我我我我我我——』

「うーん、まあ、普通はそうだよな・・・

儀も今考えていふことは後でがんがんで

今は戦争に集中しよう・！

午後になつた・・僕らは笛の音とともにまつさきに〇クラス

に向かって走った・・

試召戦争・・・開戦だ！

～弁当、そして・・～（後書き）

今回は秀吉がちょっとおかしかった話になっちゃいました！おかしかった理由は

Dクラス戦の後で分かるので楽しみにしてくださいー！後、毎回いいますが、この小説を読んで頂ければ僕としても幸いです。

～Dクラス戦～（前書き）

やつといの試験召喚獣戦争の最も大事な部分、試召戦争を書く」と
ができますー。ここまで遅くなってしまってすいません！良い作品を
書けるように頑張るので、見ていただけたら幸いです。

～Dクラス戦～

影譲 side

「秀吉へ 前線部隊の僕達って最初に戦うんだよね～」

「やうじや。わしらの役田は最初に戦う、いわば奇襲部隊じゃ。どちらの攻撃が最初に決まるかで今後の戦闘状況、経過が決まってしまつ・・・氣を引き締めて戦うぞい！麗也よー！」

僕らの役田は前線の維持、及び時間稼ぎだ・・・・

そして、僕はなぜか、この部隊の副隊長を命じられた・・・

そんな役・・僕にはとても任せられないと思ひながら・・

そして、秀吉はこの隊の隊長・・つまりリーダーだ・・

一応命令には従うけど、秀吉に命令つてまつたく似合わないな～

そんな僕の考えをよそに秀吉はよそと動いて部隊の人たちに

命令を下していた・・おおつと・・僕も戦争に参加しなきや！

「麗也よ、お主はわしの援護をしてくれ！わしは攻撃にむかうか

「お主はわしの守り役に入ってくれよ？」

「うん・・分かったよ秀吉。」

普段はぼくが秀吉を守る側なのに、この場面では僕が逆に守らざりてしまつ・・自分の力の無さことでも腹立たしい・・い、いや・・こんな時にイラつこちや黙田だ！集中しよつ、そして、少しでもこの戦争の状態を良くしよつ・

「おい、おい麗也！しつかりせい！今は集中じやぞ？」「

そんな事をいいながら僕の頬を秀吉がパンパンっと手でたたいてきた・・よしーもつ考え事はよそつ・

「ゴメンネ！秀吉！もう大丈夫だから・・

「そうかのうん？前方から敵じゃーさつき言つたよ援護を頼むぞーそれじゃあ、試験召喚獣、サモン！」「

「うん！分かつたよー秀吉！」「

そうこうと、秀吉の足元に幾何学的な魔方陣が現れた・・・

「これが召喚獣を出すときの魔方陣か・・僕はこれで見るのが一度田かな？」

そういえば、僕の召喚獣はどんな武器を持っていたっけ？

ううん・・なにしろ初めて召喚したのは、入学する前の一ヶ月前だからなーまあ、たぶん弱くないと思つたけど・・

「まあ、とりあえず・・サモンーっと・・」

僕の足元にも幾何学的な魔方陣が出てきた・・召喚獣が出てくるまで

秀吉の召喚獣でも見ておひつかなー？

うーんと・・秀吉の召喚獣の武器は・・大きな長刀に服は『道着

のよつな服を着ている・・顔は秀吉が『テフォルメされた顔をしている・・

なんだかとてもかわいらしげ・・おおつとーもつ召喚が完了していただようだ・・

ええつと・・僕の召喚獣の武器はつと・・おおすゞいなー結構・

刀としては短いけど・・すげい切れ味が良さそうだ！ふうー・・よかつた、

よかつた。ふくは、なんかよく分かんないけど・・武装がとて もしてある

鎧みたいだ・・つておおーー結構強そうだよーこの召喚獣、期

待できるだよー。

そんな事を思つていたら秀吉から声がかかつた・・何だひつ。

「麗ちゃんひつをかからなくていいのじゅー早く援護をしてくれー。」

「おーっと、『あさ、『めんー今助けにこへよー。』

そして僕は秀吉が入つてこぬフイールドの中に入つた・・

よーしーわいつかべの召喚獣の強わを見せいやるー。

「うん? 秀吉ーなんか召喚獣の頭の上になにか書いてあるよ? 」

「あれは召喚獣の強さを表してこむ、こわばテストの点数じゃな。わしあまり勉強ができるからあまり点は上では無いんじゅが・

・

そつか、あれが強さかーどれぢれ・・僕の召喚獣の強さは・・

化学 木下秀吉 65点 影譲麗ちゃん 32点

「お主の召喚獣はなぜそんなに弱いのじゅー。」

「し、知らないよーそんなの、僕が聞きたいくらいだよー。」

うーん・・見た目はみんなに強そうなのに・・中身があれじゅ
な

はつせつ嘗て残念だよしあつと・・

「お、おこー麗也ーよや見をするなーよや見を・・」

「へ?」

ザクッ!

「い、痛い!なんで?普通はRPG者にはダメージが無いんじゃな
いの!」

「ふむ・・もしかしたらお主はなにか特別かもしだぬな・・明久と
同じで・・」

「も、もしかして・・吉井くんと同じ観察処分者なの?そうだった
としたらへたにダメージはくらつとはいけないね!」

「うむ・・セガジヤのへつとやんなことよつも今は集中せー!」

「はーい・・」

「ここからとせ・・召喚獣の操作はやつやすこつてことかなー?」

「よつと・・

「よつと・・

『わーいわー』

おーやはり上手くこつた!これなら点数が低い部分をカバーで

れる。一

「麗也、お主なかなかやつよのうへ」

『へへー隙アリ——!——!』

「あ、危ない！」

バーンッ！

「れ、麗也よ！大丈夫か？」

「う、うん・・ちょっと手が痺れるけど・・秀吉は大丈夫かい？」

「う、うむ・・わしは大丈夫じゃが麗也はそれじゃもつほとんどんび動けぬぞ？」

「ううん・・僕はまだ戦えるよ！」

『へへ・・大分弱つてるぜ・・これまでだー死ねーーー！』

僕はここで終わりか・・そんな事を思つていた時・・

「え、援軍じゃー麗也よ！援軍がきたぞ！」

「よしー秀吉に影譲くん！君たちはもつほとんど点数が無い」と
思うから点数補充に行つてきてー！」

「わかつたのじや。よし、麗也よ！教室に戻るぞい！」

「う、うん・・分かったよ・・秀吉」

僕たちは点数補充のために教室に戻った・・・

そして、点数補充をやつていると、いつの間にか戦争は終わって

いた・・ぢひやら僕たちの勝利のよひだ・・

「終わったの、う・・麗也・・」

「うん、そうみたいだね・・秀吉」

僕は安心しきつたせいか、その場で真っ先に倒れ、

そのまま数分ぐらいいべつすり寝てしまつた・・・

～Dクラス戦～（後書き）

いかがだったでしょうか？一応Dクラス戦は終われたのでよかったです！まあ、ほとんど省略とかをしてしまいましたが・・・それでも読んでもらえると僕にとっては嬉しい限りです。

～勝利～（前書き）

今回はロクラス編が終わった後の話を書きたいと思います！できる限り秀吉と麗也のイチャイチャ？的なものにしないように頑張りました！それでは、こんな小説ですが、最後まで読んで頂けると幸いです。

～勝利～

影譲 side

「う・・うん・・眠たかつたからちょっと寝てしまつたよ・・・
だけど・・やけに寝心地がいいなーなんでだろう・・つて、
ええー！秀吉なにやつてるのー！」

「やつと起きよつたか・・麗也。何をやつてるつて、膝枕？と
確かにうはずのものをやつてるのじやが・・・

「違うー・違うー・なんで僕が秀吉の膝で寝ているのかつて聞きたいん
だよー。」

「ふむ・・それはのう・・お主がさつき真つ先に倒れたじやろう?
それで・・頭を床にぶつけると危険じやから・・わしの膝の上に
お主の頭を置いたのじや・・ビーナス？寝心地は・・・

「う、うん・・寝心地はね～はつきつゝものすいへ返持ちこ
いよ！」

「そつか・・それはこちりとしてもやつたかいがあるのじやー！麗
也よ・・

もう少し寝たいか？」

「うん・・僕まだ後10分ぐらい寝たいな～

「わかったのじや・・なら、何か用があるとき起きやす弋?・い
な？」

「うん・・わかつたよ秀吉」それじゃあおやすみ・・秀吉」

「いやあ、おまえのじゅうじや。」麗子。

うさん・・それにしてもこの膝枕氣持ちいなういつそのまま

ずっと寝ていたいよ・・・

・・・・おい、麗也よ・・起めるのじやー麗也ー早く起れるの

「れは？」

僕が目を覚ました時には手には手錠がしてあって周りにはクラスの

皆がいた・・物騒な物を持ちながら・・・

「み、みんな落ち着こうよー！ちょ、ちょっとやめてくれよ・・・
あはは・・そんなナイフを匕うするんだい？もしかして僕に刺
そうだなんて・・・

「考えてないよね？」

「影讓麗也・・キ・サ・マ・ヲ・コ・ロ・ス!・・・・・」

『血祭りにしてやるわー!』

そんな時だった・・空から天使のような声が聞こえてきた・・

「…おはようございます、麗ちゃん。起きたの?」

「うん・・・秀吉・・てなんだこれ――!」

僕の手には手錠がしてありクラスの皆は・・・つてこれって夢の中と

同じじやないかー! おやかあれつて正夢?

死ね——！影讓麗也——！！！」

「うわ―――！死ぬ―――！―――！」

僕はこの時30分もボクボクにぎれていた。・・・と、

そんな事実を後になつて知つた僕だつた……

卷之三

「まつたくじや・・ほれ、まだ痛むか?」

「うん・・まだ痛いよ・・・」

僕は本当に殺されそうになつたが何とか助かつた・・・

「」のクラスの前で秀吉と話したり、何かをするのは

もうやめよ！」・・・

「影譲くん、大丈夫かい？確かに皆も悪いけど・・・君も十分悪いよ？秀吉に膝枕をしてもらつなんて、そんなのこのクラスの前でやつたら「殺してください」とて言つてるようなものだよ？」

僕は「うーん」一度とそのよつた事はしない・・・
と。

「おー影譲・・・お疲れ様・・・お前らのおかげでこの戦争に勝てた
んだ・・・

ありがとなー！」

「いやこち坂本くんー君の指揮のおかげだと頷くよー。」

「うん？・・・ん、そりか？うつされると黙れるじゃなーいか・・・」

『いや、坂本のおかげだぞー。』

『ほんと、代表のおかげだと思つぞー。』

「うん・・・僕も今回はうつし・・・彼のおかげで勝てたよつた

ものだからねー。」

「おい、お前ら・・今日は疲れたから解散な・・以上!」

「あーまつて坂本くん! ちょっと聞きたいことがあるんだけど・・なんでロクラスを奪わなかつたの?」

「うん? その事については明日でいいか? 今日はもう疲れてるんでな・・」

「あ、やうなの? だつたら明日でいいよ!」

でも、うなづき気になるな~ま、いいか! 明日聞けるし・・

「じゃ、帰ろつかー! 秀吉ー!」

「うむ・・やがやな。」

僕はそのままの声の帰り、ずっと秀吉とこっしょに今日の事を

話していた・・・

～勝利～（後書き）

え～すいません！予想通り秀吉と影譲のイチャイチャになってしま
いました・・・

本当にすいません！次はちゃんとした作品を作りたいと思つので、
こんな小説でよければ読んでください！読んでくれればこち
ても嬉しい限りです。

～手作り弁当～（前書き）

え～今回の話の前に少しお知らせですが・・僕の小説つて所々日本語とか間違つてますよね！

だから1～12話まで全て直しました！それだけです・・別にどうでもいいって方はすいません！そして今回の話ですが・・あの姫路さんの手作り弁当のはなしになります。でも、秀吉が実は・・まあ、この続きが気になる方はなんとなく見てください！すいません！生意気なこと言つちやつて・・とにかく、どうぞ！

～手作り弁当～

影譲 side

「や～ん・・よく寝たよく寝た・・うん?あそこそこのは、もしかして・・秀吉?」

あの、後ろ姿、そして髪は絶対に秀吉だー

「おーーーおはよ!つー・秀吉!ー。」

「うむ?なんか柄にもなく疲れているところか、

悩んでいるような顔をしてこらるよー。」

「そ、せうか?なぜ、わしがそのような顔をしてこらると思ひのじや?」

「うん?なぜって、それもちうと・・

「だって、こつもの元氣で可愛らしこ顔じゃなかつたから・・

「か、可愛らしこ顔・・・じやとへおぬしさわしを女と勘違いをしておるのか?」

「あー!めん・言い方間違つてた・・可愛らしこじやなくして、カワイイだったねー。」

「な、なにも変わったおひるのじゅが・・こつたいたいびうしたのじ
や?」

最近の麗也はちよつとおかしこぞ?」

「そんなこと無ことはーだつて僕のビリが・・・」

あれ?ちよつとおかしこぞ僕・・わきの会話を聞いて出でた・・
わつき僕は秀吉の顔を可憐にしに顔、つてこつたよひな・・・

つてアレ?僕、そんなこと秀吉に言ひやつたの?

「う、じめん・秀吉ーあんな事言ひやつて・・・」

「いや、別にいいのじゅぞ?麗也は最近疲れてしまつたからウ・
誰にでも間違にはあるのじゅ。」

「う、うそ・・・じめんね・・・秀吉。」

最近の僕はどうも変だ・・・秀吉の事を女の手として

意識してゐるなんて・・・たぶん・・僕の予想からして、

男だけのFクラスに馴染んでいく内に、秀吉の事を

女と見てしまったようだ・・・これからも、氣をつけなきや!・

そして、そんな事を思いながら教室に着くと坂本くんが

顔に向かってじつづつた・・・

「おーい、お前ら全員席に座れ……ちよつと置いて一事があるからよー・・・」

うん? 話してもしかして昨日ぼくが言つた事かな?

だとしたら、早く席に座ろうじょうかな?

「えー言いたい事は皆分かるかもしけねーが……俺らFクラスはDクラスを奪わなかつた・・それはなぜか? 答えはこうだ・・俺たちが欲しいのはAクラスだ・・違うか?」

『まー確かにそうだけよー・・・』

『でもなー俺達、Dクラスに勝つのが精一杯だったもんな~』

皆、坂本くんの意見に反対の意見が飛び交つた・・・

ま、そりやそーだよね~Dクラスに勝つのが確かに精一杯だったのは

事実だし・・・

「ま、確かに俺らはDクラスに勝つのに精一杯だった・・・しか

しまだ ムツツリーーや姫路の力を充分に出せていない・・それに、俺

だつて・・

な?』

うーん・・そう言わればそのような気がする・・・まだ姫路

さんの力

はあの戦争では半分以下だったし、それにまだ土屋くんも出で
いなかつたし、

ましてや坂本くんも出でていなかつた・・なのにも関わらずにD
クラスに勝つて

しまつた・・まだこのクラスには充分力がある・・

「一つめーうん聞く・・俺たちこいつんなちやぶ台や壊れた窓は
必要か?」

『必要じゃない!――!――!――!』

「俺らに必要なのはAクラスのシステムデスクと・・・

『すぐでかいテイスプレイだ――!――!――!――!』

「それならば俺りのやる事は一つだろ?』

『Aクラスをぶつたおす』などだ――!――!――!――!』

「なら、覚悟はいいな?」

『当たり前じゃねーか!――!』

『Aクラス・・絶対に倒すぞー!――!』

『おおおお――!――!――!――!』

すゞ・・・皿の熱氣で燃えてしまったなぐらい熱い・・・

あれ、次の授業つてそいつねばなんだつけ？

「お前ら――――次の時間は昨日失つてしまつた点の回復試験だ！全員ペンを持つて次の試合戦争に勝てるようにテストで良い点をどれ一分かつたな！」

『おおおお――――――』

「・・・・・ねー秀吉・・・」のクラスつてこんなに熱かつたつけ？

「・・・わしもそれを麗也に言つた所じや・・・」

「」のクラス、一応まとまつてゐるけど、こんなに熱ことかよつと
な

「うー・・・ものか」へ疲れたよ。」

「そりぢやのう、とても疲れたのじや・・・」

そんな話をしていると、いつの間にか時刻は12時を指してい
た・・

もうこのな時間か・・

「うん？ もうこんな時間が… それから毎飯の時間だな…」

「そうだね～ 雄一、あー そうだ、よかつたら僕とこっしょに食べない？」

「別にいいが… そつだとしたら早く行こうぜ？」

「そうだね… 眉く食堂に行こうか！」

「あー 吉井達食堂に行くんだ… だつたら私もいつしょにいへ？」

「えつ？ 別にいいよ 島田さん…」

「… … …俺も一緒に行く

「ムツッコーー も？ それだったらこいつその事蹟で行くわよー。」

「えつ？ 僕もいいの？ 吉井くん？」

「もちろんだよー 影譲くんもこっしょにいこー。」

「それなら、秀吉もこっしょにいこーよー。」

そんな時だった… 突如後ろから声がかかった…

「ま、待つてくださいー 今日、弁当作つたので歸りますか？」

「お、例の手作り弁当つてやつか？」

「はいー 嫌じゃなければ…」

「ありがとう！姫路さん！」

「そ、うか、そ、うい、え、ばそ、んな事、あ、つた、な・・・つて秀吉は？」

せいか黙つてたと思つたらいいない・・どに行つたんだ?

あの景譯ぐれも、結は

「あ、こめん姫路さん！僕、おもりと用事思い出しあがって

「あ、そうなんですか？だったら仕方がないですね。」

「ごめんね、本當に・・またいつかね！」

はい、
分かりました。

「影譲くんもついてないな？ま！影譲くんの分は僕が食べるよ！」

「うん・・でも、しょうがないや・・いいよ、別に。それじゃあ
皆また後でね～！」

タタタタタッ！

「あいつ、そんなに急ぐようがあるのか？」

「…………怪しかったから一応盜聴器を付けておいた」

「ナイスだ、ムツツリーーー！」

後ろから何か聞こえるけどなんの今せ気にしない。今は……

秀吉を見つけるのが先決だ！

…………心屋上に来たけど……いるかな？って、あ！

あの姿は……間違いない……秀吉だ！

「秀吉……」

「…………つむ、麗家か？姫路の手作り弁当を食べるのじゃなかつたのかのう？」

「いや……秀吉がいなかつたから、気になつて追いかけてきたんだよ……」

「まつたく……おぬしといつ奴は……でも、正直嬉しいぞい！」

「あれ？秀吉が持つてるの何？」

「うむ……れかのう？実は、朝早くから起きて作った弁当じゃ」

「え？弁当？それは自分で食べる用の？」

「いや……麗也のために、作ったの……じゃ……」

秀吉はやうやく顔が赤くなっていた……それとなぜか、

胸がドキンドキンと鼓動していた……

「僕の、・・・為・・・」・・・?

僕もさう言つと顔が真っ赤になってしまった・・・

自分で分かるほどに・・・

「れ、麗也よ・・・わしの弁当・・・食べてくれるか?」

その方にとても恥ずかしげに、そして何一つ言い方がとても

可愛かった・・・

「ありがとう、秀吉・・・僕の為なんかに・・・でも、なんで?」

「いや、おぬしが試合戦争の時にわしを守つてくれたじゃねえ。」
「この弁当はほんのお礼じしや。」

うへん・・・あんまり記憶に無いんだけど、かすかに覚えている
気がする・・・

覚えてこないよくな・・・

「そ、それよりも早く弁当を食べるのでじや一時間が無いやー。」

「え?あ、うん・・・じゃあ、いただきますー。」

どれから食べようか・・・全部おこしありだなー・・・うへん・・・

よし、じやあ最初はからあげからー・

「じゃあ、いただくなー秀吉ー。」

「味には自信が無いのじゃが・・・心つかのう。」

「すいべおいしによー秀吉つてもしかして料理上手?。」

「いや・・・全くじゃが、壇元でもらえて嬉しいのじゃー。」

「うーんーどれもこれも全部おいしいーうん? やうこねば

誰かが手作り弁当を作つてもうひたひアレをやつしめうなつて

言つてたな~

「ね~秀吉~ちょっとお願ひがあるんだけどね~アーンつてやつて
くれないかな~? 子供の頃の夢だつたんだよ~ね~お願ひだよ

~」

「う・・・まつたぐ、そんな田をあんな・・・つたぐ、今日だけじ
やが?」

やつたーーやつてくれるー嬉しくな~!

「ほれ、アーンじゃ」

「アーン・・・(モグモグ)おいしによー秀吉ー。」

本当に・・・今日は大変だったけど・・・良い田になつたな~

「あれ？ 一つ聞きたいんだけど……朝元気がなかつたのって……疲れてたから？」

「「「む・・・まあそれもあるんじゃが・・・なまはと違ひの「」」

「「ん？だつたらなんで疲れてたんだり「」」

「「と・・そんな事よつも、やつれと食べてしまつがいーーー」

「「ん、分かつたよー秀吉ーー」

僕は秀吉と昼食を食べた後にすぐに教室に戻つた・・・

～手作り弁当～（後書き）

いかがだつたでしょうか？なんか、途中から変な風になりましたが、
気にせず読んで頂けたら幸いです。

～Bクラス戦に向けて・・・（前書き）

いや～本当にすいません～かなり小説を投稿するのに、日が経つてしましました！

本当に、読者の方々には本当に申し訳ないです！小説がなかなか書けなかつた理由は、冬休み色々と大変でして・・・でも、これからは小説が書けるようになつたので、安心してください！そんな事よりも、今回の話はBクラス戦に向けての話になります。楽しんで読んでもらえれば幸いです。

～Bクラス戦に向けて・・・

影譲 side

「いや～しかし、秀吉の作ったお弁当おこしかったね！」

「そ、そうかの？ そんな事を言われると照れるのじや・・・」

「いやいや、全然お世辞じゃなこってー。それと、照れた時の秀吉の顔・・カワイイ・・」

「うむ？ なんか言ったか、麗也？」

「い、いや・・何でもないよー秀吉ー」

あ～なんか最近、ますます秀吉が女の子に見えてきたよ・・・

でも、秀吉は男の子だしな～惑わされちゃ駄目だ！

そんな事を思いながら廊下を歩いて、Bクラスに着いた。

「皆～「めんねーーーあ、後姫路さんのお弁当おこしかった？」

そんな事を言つと吉井くんがものす「こ速でこひけに来た・・

なんだろ？・・

(影譲くんがいなかつたせいでのことは大変だったからねー)

僕にしか聞こえない程度で吉井くんがそう言つた・・・

(大変だったって・・・いつたいじうごう事?)

(実は、姫路さんがお弁当作るつて言つて作つてきたでしょ? 初めは

おいしゃうで食べたいと思つてたんだけど・・姫路さんの弁当つて恐ろしいほどまずかつたんだよ!だから、影譲くんがいなかつた分雄一が死に物狂いで食べたんだから・・・)

ちよつと言つたことが分からなかつたので一応整理してみよう。

・まず、僕がいなかつたせいで吉井くん達は一個余分に弁当を食べてしまつた

・そして、一見おいしゃうで見える姫路さんの弁当だつたが、実はすくすくまづかつた

・そのせいで今、坂本くんが氣絶?をしてい

・・・以上の事を考えてみると、まあ形がどうあれ僕が悪い事に変わりはない・・

謝らなきや!

(吉井くん!ほんとうにめめめめね!)

(いや、僕よりも雄一に謝つた方がいいかも?・)

そ、そうだな・・一番の被害者、坂本くんに謝らなきゃいけないね

(「めんね！坂本くん！悪気は本当にないんだ、許して…）

(まあ気にする・・・な・・)

ヤバイ・・坂本くんの田が虚ろになつてゐる・・本当に申し訳ないな

(そ、それに・・影譲よりも全然罰は良い方だからな・・)

「うん？何の事言つてゐんだら？・・坂本くんは・・・

「そ、そんな事よりも雄一！次つてビリと戦つの？・

それは僕も気になる・・・何て言つても、相手次第で今後の予定が変わるからな

「ん？試合戦争の相手の事か？」

「うん・・・」

「相手はBクラスだ・・」

「えつ？Bクラスが相手なの？」

「しかし、なんでBクラスを狙うの？」

（うん）
そう僕が言うと坂本くんは険しい顔でいつ答えた・・・

「はつきり言おう・・俺たちじゃどうあってもAクラスには勝てない」

「え？ 雄一にしてはらしくないね・・まあ、普通はそう答えるか

まあ、Aクラスって言つのはヤバイと噂で聞いたことがある。クラスの、

50人の内、40人はBクラスよりも点が上の連中だけど、残りの10人が

どうもやばいらしい。特に、Aクラスの代表をやつている霧島翔子さん。あの

人の力は想像を絶する力で、恐らくFクラスの人々が彼女に奇襲に成功したとしても、

逆に返り討ちに遭つてしまつ。・・・・・どうあっても、坂本くんが言つてた通り、

Aクラスには負けてしまう。

「それじゃあ、僕たちの最終目的はBクラスに変更つて事?」

「いや、最終目的は変わらない・・」

「それじゃあ、言つてる事がさつきと違つじやないか!」

「確かに俺らのクラス単位では勝てない・・だから一騎討ちに持ち込むつもりだ」

「一騎討ちに持ち込む? どうせって・・・

「もちろん、Bクラスを使つ

Bクラスを使つだつて? どうやるつもりなんだろ? ・・・

「明久に一つ問う・・・下位クラスが負けた場合は設備はどうな
か知つてるか? ?」

え~っと確かに、下位クラスが負けた場合は設備のランクが一つ
落とされるはず。

「設備のランクが落とされるんだよね?」

「その通りだ・・・では、上位クラスが負けた場合はどうなる? ?

確かに、相手クラスと設備を入れ替える事ができるんだよね。吉井
くんもこれぐらい

わかつているは・・・

「悔しい」

「す・・・つてええーーー悔しいって何? まあ、確かに悔しいかも
しないけどさ~

もうちょっとマシな言葉考えてよ~.

「はあ~・・・明久に聞いた俺がバカだつた・・・

「なんだと、バカ雄一了！」

「…………」めん、吉井くん。それはさすがの僕でも思っちゃった。

「まあいい・・上位クラスが負けてしまつと相手と設備が入れ替わつてしまつ・・

そこで俺の考えなんだが、それを利用してBクラスと交渉する

「交渉・・・ですか？」

「ああ・・まず、Bクラスを殺つたら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと

攻め込むよう交渉する。設備を変えたらFクラスだが、Aクラスに負けるだけなら

Cクラス設備で済む。まず、上手くいくだろう・・

「ふんふん、それで雄一?」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』と

いつた具合にな

「「「「「なるほどーーー」「」「」「

その場にいた、土屋くんを除く皆が（僕も含む）理解した

「しかし、それでも問題はあるじゃうつ。体力としては面倒じやが、Aクラスとしては

一騎討ちよりも試合戦争の方が確実じゃからな。それに・・・

「それに?」

「そもそも一騎討ちに勝てるじやねつか?」ひづけ姫路がいる事は全クラス中に知れ渡つたかもしだれぬし・・・

秀吉の意見は分かる・・・姫路さんがこるところはこの前の前戦いで分かつただろ?うし・・・

相手も何らかの姫路さんへの対策は練つてはいるはず・・・

「その辺の問題に関しては考えがある。心配するな

「とにかく、Bクラスをやるぞ!細かい事は後で教えてやる」

「ふーん、雄一にも考えは一応あるんだ」

「おっと、明久・・・今日のテストが終わつたらBクラスに宣戦布告しに行け・・・

「断る・・雄一が行けばいいじゃないか!」

おつとー・急に吉井くんのオーラがどすグロイ物になつているぞー・

「やれやれ・・なりジャンケンで決めるか?」

「ジャンケンだつて?」

うーん・・僕の予想で吉井くんが負けるだろ?・・・

「OK! いいよ!」

「なら、心理戦で行こう!」

心理戦か・・これなら、まだ吉井くんにも勝利の機があるぞ!

「分かったよ。なら、僕はグーを出すよ!」

「そうか・・なら・・・」

「俺はお前がグーを出さなければブチ殺す」

「えー! それって・・・」

駄目だ・・吉井くんは絶対グーを出してしまつ・・

「行くぞ、ジャンケン」

ポンッ!

吉井くんはグーを出し、坂本くんはパーを出した・・・やけいや
つたよ吉井くん・・

「決まりだ・・行つて来い明久」

「絶対に嫌だ――! 理不尽過ぎる!」

まあ、吉井くんが考えていたものとちよつと違つたかもしれない
ね・・・・・

「もしかして明久、Dクラスの時見たいになる事を心配しているのか？」

「それもあるけど……」

「なら大丈夫だ・・今度こそ保証する」

あらり・・・坂本くん、あんな目で見てるよ・・・」れじやあ吉井くん断れないだろうな

「なぜなら、Bクラスは美少年好きが多いと言われているからな

「そつか・・それじゃあ、僕にしかできない重大な任務だね！」

「でも、お前不細工だしな」

うわつー本人を目の前に普通に言つちやつてるよ、坂本くん！

「失礼なーどこからどつ見たつて365度美少年じゃないか！」

「吉井くん、5度だけ多いよ・・・」

「実質5度じやな・・」

「二人なんて、嫌いだーーー！」

そう言つと、吉井くんは泣きながら自分の席に向かつた

泣かなくてもいいのに・・・

「あ、それとマッソニー・テープの中には何があった・・・」

「・・・・・・・・一人のろけ話

「そうか・・・おーい、須川ー！」

「うん?なんだ、坂本?」

「いや実はな・・・」（アリヨアリヨ）・・・といつぞだ

「ちうか・・・影譲、ちよつと来い・・・」

「うん?須川くんが僕を呼んだかな?・・・なんだか嫌な予感がする・・・

「何かな、須川くんつて、あああーー!」

「キサマには一回常識つて物を教えてやるーー!」

須川くん曰く『常識』と云ふものを体に呑み込まれた・・・

～Bクラス戦に向けて・・・～（後書き）

うー・・・なんか久しぶりに書いたのであまり良いものができませ
んでした。これから、もつとおもしろくできるように頑張りますの
で、これからもこの小説をよろしくお願ひします！

～Bクラス戦前編～（前書き）

え～また僕の小説をみてくれた方、ありがとうございます～・今回は、
Bクラス戦を
書きたいと思います。長いので一つに分けて書きました。見てくれ
たら幸いです。

影譲 side

「あー……えらい目に遭つた……」

・
僕は須川くんに授業中にも関わらず制裁？見たいなものを受けた・・・

しかも、それを見ていた先生は何の注意もせず、そのまま授業をしていました・・・

全く・・・」の学校はちょっとおかしい！いや・・・かなりだ！

でも、僕だけが何もボコボコにされていた訳ではない・・・

吉井くんも、その類の制裁を受けた・・・自分の事は言えないけど、なんだか

かわいそりだ・・・しかも、吉井くん・・泣いてるし・・

「しかし、麗也も相変わらず須川にやられておるのう・・・どれ、痛むか？」

「はあ～秀吉だけだよ・・心配してくれるのは・・

「ひひ～そんなこしがみつくでない・・また、須川にやられるぞい
？」

そ、そうだった……こんな事をしていたら、また須川くんにやられてしまつ……

「そ、それよりも、吉井くん……試召戦争の宣戦布告はして来たの？」

「うん……死にそうになつたけど……一応明日の午後つて言つてきたよ……」

「わうか……だつたら、今日は解散だ……皆、明日の為に備えるようにな……以上！」

ふうー……解散だやつと……さて、疲れだし……今日は帰ろうつかな？

「それじゃあ、麗也……いっしょに帰るぞい……」

「うと……そうだね、じゃあ帰ろうかー秀吉ー！」

僕は秀吉といっしょに帰り、家に着いたらすばに眠つについた……

「よーし、貴様ら……Bクラスを殺る気は充分か？」

『 もひるんだ――――――!――!――!』

そんなずぶとい声を聞いたのは翌日の晝の事だつた……

しかし、今日は疲れたな・・・朝からずっと補充テストだったし・・・でも、そんな苦労も今日で終わる・・・

「麗也よ・・・わしらの役目は中堅部隊、しかも今度はお主が隊長でわしが

副隊長じや・・・ちゃんと、やるのじやぞ?」

「ええー! そんな話は聞いてないよ?」

「すまない影譲・・・以前の試召戦争でお前の力を見させてもらつた。・
・
そこで、分かった事はお前が明久と同じ観察処分者という事だ。・
・

そして、召喚獣の扱いは上手いと秀吉に聞いている・・・
点数が低いお前でも戦力には充分なる、だから隊長をお前に決め
た・・・」

「あの、実際には観察処分者じゃなくて、それと同じ力が使えるつ
てだけで・・・」

「とにかく、無事大役を果たせ! 影譲・・・」

うわ、思いつきリスルーされた! ま、いいや・・・どうせ僕の出番
なんて指示くらいだし・・・

キーン! ノーンカーン! ノーン

あ、鐘が鳴った・・・試召戦争、開戦だ!

「麗也よ・・・わしらは中堅部隊じや・・・まだ出陣はせんぞい?」

「わ、分かってるよ!それと、気になつた事があるんだけど、Bクラスの代表つて誰?」

「代表つて誰?」

「つむ?麗也は知らなかつたのか?まあ、無理もないのう・・・Bクラスの

代表はあの根本らしい・・・

「根本くん?それつてどんな人?」

「まあ、一言で言つならば、極悪非道のやる事に手段を選ばぬ・・・最低な男じやな・・・」

「うわーそれつてもう、人として駄目なんじやないの?」

「だ、だつたらさ・・・そんな最低な人がやる事なんて分からぬいから、一回吉井くんを

後退させた方がいいんじゃないの?」

「そんな人が考える事なんて・・・想像もつかない・・・

「そうじやのう・・・雄一よ、ちょっと明久達を後退させりよつてきてよいか?」

「ああ?別にいいが・・・ぐれぐれも戦闘なんかするなよ?」

「分かつてある・・・麗也よ、行くぞい・・・」

「ええ？ああ、うん・・・」

あんま、秀吉元氣無いな・・何か思い当たる節があるのだろうか・・

「！」れはひびこ・・・

「いかにも根本が考えやつなことじやな・・・」

僕らが吉井くんを呼び言ひこる間に誰かが教室をめくらへりやめくらへりしてたじこ・・・

ま、恐りへ根本くんだと思ひナビ・・・

「ねえ、雄一ーこつたこーれはひみつ事?・」

「やられた・・・根本め、地味だが補充テストにほとても影響を及ぼす

嫌がりせをして来やがった・・・」

確かに、ただ教室がめくらへりになつただけで誰も怪我してないからこゝナビ、

テストのやる気とかはなくなるよね・・・

「だが、全く作戦には影響は無い・・・安心じろ」

「でも、なんで雄一は気がつかなかつたの?」

「Bクラスと協定を結びに教室を空にしていた・・・

「協定・・だつて?」

「ああ、四時までに決着がつかなかつたら戦況をそのままにして続
きは明日の

午前九時に持ち越し。それまでは試合戦争に関する行為は禁止つ
てな・・」

「それ、雄二は承諾したの?」

「ああ・・・」

「でも、体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては良いんじやないの
?」

「姫路以外は・・な?」

「そうか、そりやそうだよね・・・

「今日には決着がつきやうに無い・・恐いく、協定どうじになるだ
らうつな・・・」

「ま、そななるね・・・」

「明日にはクラス全体の力よりも、姫路個人の力が必要だからな・・

「

「あ、だから協定を承諾したんだ・・・」

「ああ・・・この協定は」つむとしてはかなり良いからな・・・

うーん・・・なんか引っかかるな~根本くんといつ男はそんなに甘い男じゃないはず・・・

「とりあえず、明久達前線部隊は戦場に戻り、影譲たち中堅部隊は戦場に行け!」

「うん!分かったよ、雄二!」

「分かつたよ坂本くん!秀吉、行こつか!」

「つむ!..」

「シャープペンと消しゴムの手配は任せせておけ!」

僕らはお互に氣を付けるようにして会って、戦場へと向かった・・・

「ああ~疲れた・・・」

「そうじゅのう・・・麗ちゃんよく頑張ったぞい!」

そう言つと秀吉は僕の隣に座つた・・・

「また、わしの膝で寝たいかの?」

「いや、それはまたの機会にして!」

また、ボクボクにされるのは嫌だ・・・

「・・・・・（ハハハ）」

「うそ、どうしたムツツヨーーー？」

やつはと十屋くんは不可解なことを語りだした・・・

～Bクラス戦前編～（後書き）

すこませんー。今回ばかりは長いので、ここで終わらせてもらひますー。読んで
もらひると幸いです。

～Cクラスへの疑惑・・・（前書き）

え～っと・・・今回はじCクラスへの疑惑の所の話です・・・楽しんで読んでもらえたら、うれしいとしても幸いです。

～Cクラスへの疑惑・・・

影譲 side

「・・・・・ 実はCクラスが近々試召戦争を起すらしい」

土屋くんがそう言つと、坂本くんは顔を少し歪ませた・・・

「Cクラスの野郎・・・漁夫の利を狙つてるな?いやらしい連中だ・・・」

坂本くんの言つとおり、たぶんこの戦争の勝者と戦う気だろ?・・・

「坂本くんはこの状況・・・どうするの?」

「仕方がない・・・Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラスを使って攻め込ませるぞ、

って脅せばCクラスも落ち着くだろ?・・・」

「それに僕たちが勝つって向こうも思つてないだろ?しね・・・」

Cクラスとの協定は難しくないな・・・

「よし、それじゃあCクラスと協定を結びに行くか・・・影譲も行くか?」

「へん・・・どうかな?疲れたし、でもな・・・

「あ、それと秀吉はここに残れ・・お前が来ると、後の作戦に支障

があるんでな・・

「？・・・まあ、雄一がやつらにならばやつとおつしよつ・・・」

「あ、秀吉残るんだ・・・だつたら僕、残るよ・・・」

「うん？影譲、お前來ないのか？」

「うん・・・だつて、もし皆が行つてこる間に秀吉に万が一の事が
あつたら
困るし・・・」

それに、秀吉一人こゝにこられると、なんだかかわいそうだし・・・

「せうか・・・だつたら、明久、ムツツローーー、姫路、島田、須川、
行くぞ・・・」

セツツヨツヒョウは、シクラスの方向に歩きだした・・・

「麗也・・・お主が残つてくれるなんて、なんだか嬉しいぞい・・・」

「はは・・・だつて、秀吉にこやつてもらいたことがあるじ・・・

」

「むへなんじや・・・?」

はあ・・・自分からいつのもなんだけビ・・疲れたし、一回壱つ
てみるだけはある・・

「こやーちつ われー秀吉、膝枕やつてくれるつて言つてたでしょ?」

だから、皆がいない間

にやつて欲しいなーって・・・駄目かな?」

「言ひちやつたよ、僕・・・しかし、相手は男なのになんでドキドキしてるんだ?」

「なんじや・・・そんな事か、良いぞ・・・ほら、ひょっとこうちに来るのじゃ・・・」

若干、顔が赤くなっているが承知してくれた・・・その反応がなんだか可愛い・・・

「じゃあ、ちよっと失礼するよ・・・」

うわー相変わらず良い具合の膝だよ・・・本当、このまま寝ていたいよ・・・って!

駄田じやん、こんなの・・・また同じ悲劇をたどりてしまつ・・・

僕は急いで起きて秀吉に向ひついた・・・

「あ、あのをー秀吉ー?もし、坂本くん達の影が見えたならおこつてくれるかなー?」

「もしかして・・・」の前によくなりたくないからじゃな?・・・

まあ、普通はそう思つよ誰でも・・・一応、殺されかけたし、僕・・・

・

「大丈夫じゃ・・・安心せい、そんな事だひつと思つてこんな物を用

意したぞい・・・

秀吉が用意したのはとても小さな針みたいなものだった・・・ってええー！

確かにそれを僕に刺したら起きるけど・・・それって痛いよね？

「大丈夫じゃ・・・ほんのちょっとチクッつてするだけだから・・・注射みたいな物

じゃと思つてくれたらよ」・・・

くうーー！ちょっと痛そつただけど、秀吉の膝枕のリスクみたいな物だと思えば

いいんだ！

「じゅ、じゅあ・・・それで起こして、おやすみ秀吉

「おやすみなのじゅ、麗也」

僕は改めて秀吉の膝に頭を置いた・・・ああー・・・やつぱつ氣持ちいい・・・

「めひやくひや痛いじゃんこれーー電気が流れてるのーー」れつて・・・

「いや・・・やうではないのじゅが・・・

でもこれって、ビリつてしたよーでも、無事皆が来る前に起きた
し・・・

「これはこれでいいかな？」

「というか、何で皆そんなに汗が出てるの？」

「ま、まあ一色々あつてな・・・それよりも秀吉は大丈夫か？」

「わしは大丈夫じゃが・・・いつたい何があつたのじゃ？」

「実はな・・・」

（説明中）

「そつか・・だつたらこのクラスと連戦になるんだね・・・ちょっと
キツイなー！」

「だが、大丈夫だ・・そう心配するな影譲・・・向こうがそつなら
こつちだつて

考えがある・・・田には田にを・・・だ！」

この日はそれを機に解散となつた・・・

やつと言えば秀吉つてビリつてあの針を手に入れたんだ？

～Cクラスへの疑惑・・・（後書き）

今回はちょっと短くなっちゃいました！しかも、麗也と秀吉がイチヤイチャしているのを書いちやいました！でも、それでも僕の小説を見てくれると幸いです。後、

次の回で一応Bクラス戦は終わる予定です！

～Bクラス戦後編～（前書き）

今回はBクラス戦最終です！でも、ちょっと嬉しい事があります！最近、アクセス数が回復してきているので嬉しいです！これも、皆さまが見ててくれるからだと思います！これからも、この小説をよろしくお願いします！

（Bクラス戦後編）

影譲 side

「昨日言っていた作戦を実行する・・・」

翌朝登校してから坂本くんの声が一番にしてきた・・・

「作戦？でも、開戦時刻まではまだ時間はあるよ？」

実は今の時間は九時ではなく、八時半だった・・・だからこそ、皆は疑問に思っているはずだ・・・早過ぎると・・・

「Bクラスじゃない・・・Cクラスの方だ」

「ああ～なるほどねー！」

「それと、秀吉にはこれ着てもいい」

やつぱり坂本くんは「」の学校の女子の制服を取り出した・・・
つてええーーそんな物どこで手に入れたんだ？入手先が気になる所
だが、

今はそんな事は気にしないでおいつ・・・

「別に良いがなぜわしが女装をしなければならんのじや？」

しかし……坂本くんもそんな趣味があつたとは……ちよつと驚きだよね……

「秀吉には木下優子として装つてもらい、Aクラスの使者になれ……」

あ、なるほどね! 優子に化けてCクラスに圧力をかけるわけだ……

「とうとう駅で秀吉……まあすぐ着替えてくれ……」

「へ、ひむ……」

そう言つと秀吉はその場で生着替えを始めた……隣にいる吉井くんはびっくり

秀吉の着替えに夢中らしい……土屋くんはカメラを持つてものすごい速さでシャッターを

切つている……しかし秀吉……昔よりも脚とか細くなつたなーまるでモデルみたいだよ!

「麗也よ?なぜわしの脚をジロジロ見ておるのじゃ?なんか脚についておるのか?」

「い、いや……何もついてないよ……」

そつ言いながらも僕は横目で見てしまつ……すげい魅力的な脚だ……まあ秀吉自身も

そななんだけビ・・・

そんな事を思つていろいろとこつの間にか着替えていた・・・普通異性の服とかの

着替えつて分からぬのに着替えるのが早いなー秀吉は手先が器用なのかな?

「着替え終わつたでい・・・つて何で皆そんな田で見るのじや?」

「さあな・・・俺にもさつぱり分からん・・・

「おかしな連中じや」

でも、おかしいのは秀吉だとおもつ・・・なんでそんなに似合つてゐんだい?

「じゃあ、じクラスに向かうか・・・後、明久は残れ・・・

「なんですか?僕も行かしてよ?」

「駄目だ・・・はつきり言つてお前がいると・・・田障りだ、代わりに影譲、

お前が来い・・・

「え、僕?」

「そりだ、だから影譲早く来い・・・

(それに・・・秀吉に万が一の事があつたら助けたいだろ?)

いやらしい顔で坂本くんは僕にしか聞こえないくらいの声でそう言つた

「クラスに向かつた・・・まつたく・・・まあ、確かに秀吉の事は守つてあげたいけど・・・」

「ほら、どうしたのじゃ？ 麗ちゃんもさういへば？」

「ちからはそんな事も知らずに平然な顔をした秀吉・・・でも、そんな秀吉を

守つてあげたいんだよな

「せり、なにをしている？ 早く行くぞい！」

「分かってゐてー」

そつと僕と秀吉はクラスの方に向かつた・・・

「これで良かつたかのう？」

「ああー..素晴らしい仕事だったー。」

僕と坂本くんは同じ言葉を囁いた・・・

そもそものはず、秀吉は上手くこき過ぎてゐる上手くこつたから・・・

でも、その仕事をやり終えた後の秀吉はどこか満足した顔だった・・・

でも、秀吉ってあんなに演技上手いんだね！優子そつくりだつたし・・・

『Fクラスなんて相手にしてられないわー！皆急いでAクラス戦の準備よー！』

そしてCクラスの代表、小山優香さんは急いでAクラス戦の準備を仕始めた・・・

「よし・・俺らもBクラス戦に向けて準備するぞー！」

「やうじやな・・」

坂本くんがそう言つと急いでFクラスに向かつた・・・

まあ、あと試召戦争まで10分だし・・・僕も急ぐとするか！

「ドアとか壁を使って相手を追い込んでー！それから、決してBクラスを一步も行かせないでー！」

あの後午前九時に試召戦争が開始され、僕らは昨日中断したBクラス前から軍を進軍

させた・・

坂本くん曰く、『敵を教室に閉じ込める』との事・・
そんな訳で戦争を遂行しようと指示しているが、本来僕が指示をするのでは無い・・

本来なら総司令官の姫路さんだが、彼女の様子がおかしいので臨時
的に僕が指示を

執つている・・・

「姫路さん、どうしたの?」

「い、いいえ・・・別に何もありません・・・」

吉井くんがそんな姫路さんに声をかけた・・・よし、姫路さんの事
は吉井くんに任せ

僕は戦争に集中しよう・・・

「隊長! 左側の出口に援護が必要です!」

そんな声が僕の耳に届いたが・・・どうやうか? そんな事を思つ
ていると

吉井くんが僕に良い事を教えてくれた・・・

(古典の竹中先生には、ズラがずれてますよって言えば少しは時間が
がとれるから)

良かつたら言つてみて!)

そう言つと吉井くんは「いかに行つてしまつた・・・よし、実践してみよ!」

(竹中先生、ズラすれてますよ・・・)

「――!」

先生はその場からすぐに去つた・・・よし、効果は絶大だ!

「麗也よー早くここ来て戦つのじやー!」

おーー秀吉からの声が聞こえたぞー!よし、僕も早く戦いに加わらなくちや!

『あ、あいつらのコンビマジで強い!』

『な、なぜそんなに頑張れるんだ?』

決まつてるじゃないか・・・そんなの・・・

「秀吉を守るために決まつてるでしょ」

「麗也・・・恥ずかしいからあまり大きな声で言つでない・・・でも、少し嬉しいぞい!」

言つた僕もさうだけど、なんか後から照れちゃう・・・

しかし、やつは「せほとんび占規しちゃつたな……これで、僕たちの勝ちは

決定したも同然だけど……・・・・わつきかひ、ドンドン鳴つてゐるナビ
なんだろ?

ドーナツ

「うわ・・なんだいまの音は?」

なにかが壊れるような音がしたけど・・・いつたいなんだろ・・・?

「あのバカ・・・ほんとにやつやがつたよ・・・」

隣には我らが代表・・・坂本くんがいた・・でも、なんでいるんだ
ろ?

「あいつに壁を壊せつて言つたが本当にやるとはな・・・今頃、B
クラスの

代表、根本がやられたつていう知らせがくるだろ?・・・」

そう言つと徳川くんがこっちに来て焦つた顔で「んな」と言つた。
・・

「Bクラス、根本を討ち取つたぞ――――――――――――」

『やつたぜ――――――――――』

言つた瞬間、ものすごい歓喜の声が聞こえた・・・・

「やつたのう・・・麗ちゃん。」

「いや、僕じゃなくて吉井くんがお取りたんだよ。」

「それでも・・・わしはお主が一番頑張ったと思ひやでー。」

そう秀吉がついで、満面の笑みでうれしきを向こうにした

～Bクラス戦後編～（後書き）

あ～今日はちよつと疲れちゃいました！一応、元ネタの『バカとテ
ストと召喚獣』
を参考にしていますが、それでもやつぱり疲れちゃいます…この小
説を読んでもらえるところからとしても幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3080z/>

僕とバカと召喚獣達！

2012年1月10日23時47分発行